

# 科学知から総合知へ

——人類生存の課題——

服部 英二

今日は新しい塾生も参加してくれて、まさしく新しい年度が始まったという実感を持ったのですけれども、今日取り上げるテーマは、実はいま多くの大学が中心的なテーマとして考えていることなのです。「科学知」といった場合の「科」という字が示しているように、学問は非常に専門化が進みバラバラになっている。それがいま、人間が生きるために、特に人類がこぞって生き延びるために、「総合知」というものへ転換しなければいけないのではないか、これがいろいろな研究所が取り組んでいる課題であります。「統合知」という言い方もありますね。

私が今日使いたいと思っているパワーポイントですけれども、2012年3月10日に東京大学でシンポジウムがありまして、私はその基調講演を頼まれたわけです。これは東大総長室の企画によるものでありまして、私が4分お話し、濱田純一総長からリスポンデントとして2分コメントをいただき、休憩が入りまして、それから吉川弘之元東大総長が次の40分間の講演を行い、京都大学の方から総合地球環境学研究所長の立下成文教授がそのリスポンデント、こういうことになっていたのですが、4人で5時間というかなりきついシンポジウムでありました。私がそのときに発表したのは、40分の持ち時間でした。それを今日は60分ということで、そのときに使ったものを更に拡充し、同じではないものに、思っております。本郷で行ったものと同じタイトルにしてあります。

## ユネスコで考えたこと

まず初めに申し上げたいのがユネスコで考えたことです。皆さんご存知と思いますが、私はユネスコ、つまり国連教育科学文化機関に20数年間勤務してまいりました。パリ本部です。そこでいろいろなプロジェクトに取り組み、ユネスコが扱っているテーマを巡って勉強し、また、私自身もその立案に参加してきたわけですが、その中で主だったものを少しだけここに取り上げておきます。「文明の歪み」、これは私の本の中にも出てくる言葉で、文明史がひずみを持って書かれているとの気づきです。「文明間の対話」、これは1985年に私がパリで「シルクロード総合調査」を立案したとき発信したキーワードで Dialogue among civilizations です。これは2001年、国際年になります。それから「平和の文化」、これもシルクロードを研究する間に浮かび上がってきた言葉で、その当時のフェデリコ・マイヨール事務総長とやり取りしている中で、戦争の文化に対するものとし

て、この平和の文化 Culture of Peace という観念が浮上してくる、これが1991年湾岸戦争の頃の事です。2000年が「平和の文化国際年」になります。それから「文化の多様性」、これは2001年に注目すべき世界宣言になります。

これらのテーマを扱っておりますうちに、近代文明というものの自体をもう一度考え直さなければいけないのではないか、その本質を問わねばならない、ということ意識するようになったわけです。私自身の探究と活動の方向がそこに向かっていきました。

ここですでに一番重要なところを一点申し上げますが、西欧発の近代文明の本質の一つに、実は「神の喪失」ということがあった、ということに気が付いたのです。この神とはヘブライ・キリスト教の神です。「神は死んだ」というニーチェの言葉は大きな意味を持っていたのです。その意味するところを今日は皆さんと一緒に探っていきましょう。

そして今われわれは「地球システム・倫理学会」を立ち上げておりますけれども、地球倫理と呼ぶべきものの時代が来ている。それにはゴッドではない新たな神の概念、あるいは神とは言わなくとも至高の存在、その概念が再考されなければならない。これが近未来の課題になっているのです。

#### サステナビリティ——何を維持するのか？

東大も取り上げているこの「サステナビリティ」の問題は、やはりユネスコとの関連で浮かび上がってきます。サステナビリティとは何か、維持 sustain できること、あるいは持続可能性、このように訳されています。この底には近代起こってきたこととして「知の歪み」、そして人間観のひずみというものがある。これは先程の文明の歪みと関連してくるのですが、このサステナビリティに特定して考えてみましょう。いったい何を維持しようとしているのか、何を持続させるのか？

実は日本が提唱している ESD というプログラムがあります。Education for Sustainable Development のことですが、これを今文部科学省は全国の中学校、高校で推進しようとしています。これはユネスコに日本が提唱し、各国が賛同したものです。

日本が、教育の場にこの「維持可能な発展」を持ち込むことを提唱したことには意義があると思います。今その10年が終わろうとしているのですね。ところが、この中に使われている Sustainable という言葉が実は誰にもあまりびんと来ない。そこで私はこの用語の起源にさかのぼって考えてみたいと思うのです。

1992年は、人類が地球環境問題に目覚めた年、リオ・デ・ジャネイロで地球サミットが開かれ、これを重大な問題として捉えた年とされています。しかしこの反省は実は1972年に始まっているのです。このときストックホルムですでに地球環境会議が開かれております。自然遺産を第一に考えるユネスコの「世界遺産条約」の成立もこの年です。

1992年というのは、その20年後に当たり、もっと踏み込んだ国連環境会議をやろうとした年ですね。その会議は実は、UNCE = UN Conference on Environment、と呼ばれるはずでした。われわれユネスコはこの会議のキーエージェンシーなのです。国連組織というのは、ニューヨークの国連だけではなく、それを取り巻く専門機関が15ほどあります

から、その事業をどこが主導してやるかということを決める。このときは国連システムでは文科省にあたるユネスコがキーエージェンシーでした。2000年の「平和の文化国際年」も、2001年の「文明間対話国際年」もそうです。ユネスコはいつも中心的なテーマに関わっているのです。

1992年のリオの環境会議に関しては、5年位前から準備を始めたのですが、それが終わりの方になってUNCEがUNCEDになる、Dが入ってくるという変異がありました。それはどういうことかということが、今地球上に起こっていることと関連している。つまり、京都議定書などで有名になったCOP、そういった会議が開かれるたびに、EUをはじめとする西欧諸国は、日本もそうですが、環境を維持するためにCO<sub>2</sub>を減らさなければいけない、エネルギーの消費を抑えなければいけない、と言い続けてきているわけです。

ところが、中国とインドを先頭とする途上国が、1992年の会議の準備過程で、非常に強硬に反対しました。今の汚染された地球環境を作り出したのは先進国、あなた達ではないかと。自分たちで環境を壊しておいて、今われわれが発展しようとする、あなた達はそれを止めにかかる。たとえ環境が汚れても、われわれには煙突が必要なのだ。こういうのです。つまり、先進国が加害者である、われわれは被害者である、という論法ですね。

これが実はかなりの説得力をもったわけですよ。それでUNCEに and Development を付けてUNCEDと、会議自身の名前が変わったのです。そのとき、この自然保護と矛盾する発展=開発 Development という言葉を入れるために考え出されたのが、先進国にも、発展途上国にも受け入れられる、Sustainableという言葉だったのです。維持可能ということを使うとき、先進国は、これ以上地球環境が悪化したならば、もはや産業成長もありえないから、環境が維持できる限りでの発展とこれを読みますね。それに対して、中国・インドをはじめとする途上国は、Sustainable Development の Sustainable という形容詞は Development にかかっている、開発が維持できる、と読んだということなのです。私はそのとき、そこにいましたからよく覚えていますが、1990年代初頭にこの語が世界用語に入ってくるのです。Sustainable というのはその当時は非常に新しい言葉として入ってきて、それがあのリオの地球環境会議の中心概念になっていくんです。

### 成長という神話

しかし、こういうことを考えますね。やはり「成長」ということに、各国はしがみついている。そのおかげで、「持続可能」という双方に玉虫色の解釈ができる言葉となった。これはだから日本の民主党と自民党だけがやっていることじゃないのです。国際社会でもそういうことがある。その妥協のおかげで、それ以来世界のエネルギーの消費量は減っておりませんし、CO<sub>2</sub>も増え続けている。そういう状況が続いているということです。

現在の世界情勢を見てみましょう。最近フランスで大統領選挙がありました。社会党のオランド党首が、現職のサルコジ氏を破って選ばれたわけです。なぜ彼が選ばれたか。もちろんサルコジにはうんざりした、サルコジには出て行ってほしいという国民の気持ちも

ありました。

しかしながら庶民感情の底にあったのは何でしょう？ 今EUはギリシャの金融危機に続いてスペインの金融危機を目の前にして緊縮財政をやっていますね。それが、庶民の間に不満を広げている。ヨーロッパ全体の問題なのです。そこに目を付けたオランダ候補が「成長」Croissanceという言葉を選挙戦で入れた。自分はヨーロッパの共同のアクションプランに成長の要素を入れますと。それで勝ったのですよ、大統領選挙に。今ギリシャで17日に二回目の総選挙がありますけれども、そのキーワードがやっぱり成長ということになります。この「成長」というマジカルワードを入れないと、もう投票しない。それで「緊縮」でやっていこうとする政府は負けていくという現状があるのです。それくらいこのDevelopmentというのは、すごい観念ですね。現在の人間の体にしみこんだ、すべての人の体にしみこんでいる概念になっているということです。

そこで地球と人類の現状ですが、このままではアポカリプスの予感を否めません。地球は、これは環境学者のすべてが認めていますけれども、再生力というものを持っている。自然は回復する、回復力ですね。しかしながらですよ、現在人間はその元を破壊している。回復力というのはちょうど銀行口座のようなもので、そこに元金がありますとそこから利子が出てくるというようなことですね。利子だけで生活していけばいいのですけれども、それが利子だけではなしに、元金の方に手をつけているという状況が、自然に対しても起こっているわけです。

#### 人口曲線は何を語るか？

なぜ人類はそのように地球の再生力の元までも破壊しようとしているのか、それを考えるにはやはり人口問題というものを切り離してはいけません。地球環境問題を説くいろいろな言説がありますが、この中で人口問題というものを抜かした論説はだめです。人口問題こそがキーポイントなのです。日本のように少子化のため総人口も減っていくという国では、そのことはピンとこないかもしれませんが、世界総人口、この地球の上に住んでいる総人口のことをよく考えないと、あらゆる環境の議論は無意味なものになるのです。ここで20世紀が特に問題です。少し長い20世紀という、たかが100年あまりの間に、つまり、あの名古屋で長生きしていた、きんさんぎんさんが生きていたあの期間に、世界人口は4倍になったわけです。一人の人が生まれてから死ぬまでの間に、ですよ。しかもその間にエネルギーの消費は、10倍になっているのですね。

今国連の観測のデータでは、2050年に人口は92億に達する。では、世紀末に100億に行くのだろうか、これはもちろん地球が耐えられる限界を超えます。なぜならば、現在の70億という人口でも、もし新興国、例えば今躍進著しい中国やインド、それからブラジル、東南アジアの国々のすべてがアメリカ並みの水準の生活を欲するならば、地球が4個必要なのです。現在でもですよ。もし92億という状況になったときには地球は5個か6個必要なのです。そのぐらいの恐ろしい数字になっているということです。

一方、いま人類の横暴と言いますか、人類の自然支配のおかげで毎日100種の生物種が

地上から姿を消していくという現象が起きている。これは過去の数世紀の平均の100倍のスピードです。それが更に加速しているのを私は実感しております。というのは、私がまだユネスコに在勤していた頃、今から約20年くらい前ですが、その当時「人と生命圏」MAN & Biosphereという環境専門部局の学者が、毎日50種の生物種が地上から姿を消しているということを言うのを聞いて驚いたのです。ところが現在では、すべての専門科学者が100種というのです。100の生物種が毎日姿を消しているという恐ろしい現象が起きているということです。

『地球との和解』というこの本ですが、これはユネスコの出した地球環境問題に関する高度の報告書です。それをわれわれの方で翻訳しました。ここにおられる多くの方にもこの翻訳に参加してもらいました。監修は立木先生と私ということで出ています。つまり地球システム・倫理学会の監修という形で出版したものです。この中から1つだけ曲線を出しておきます。(f.1)

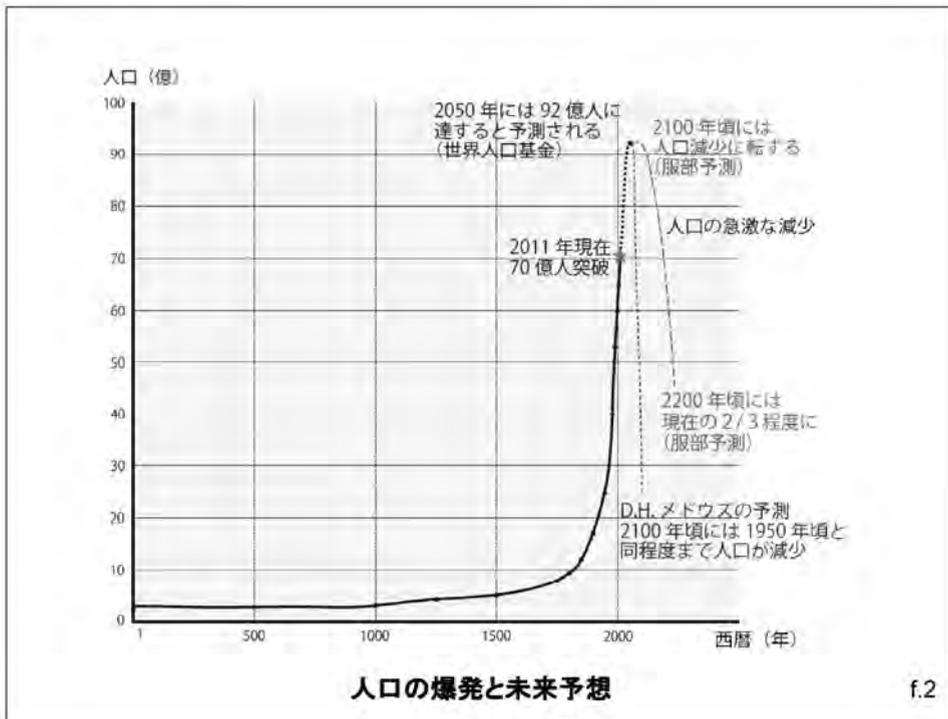
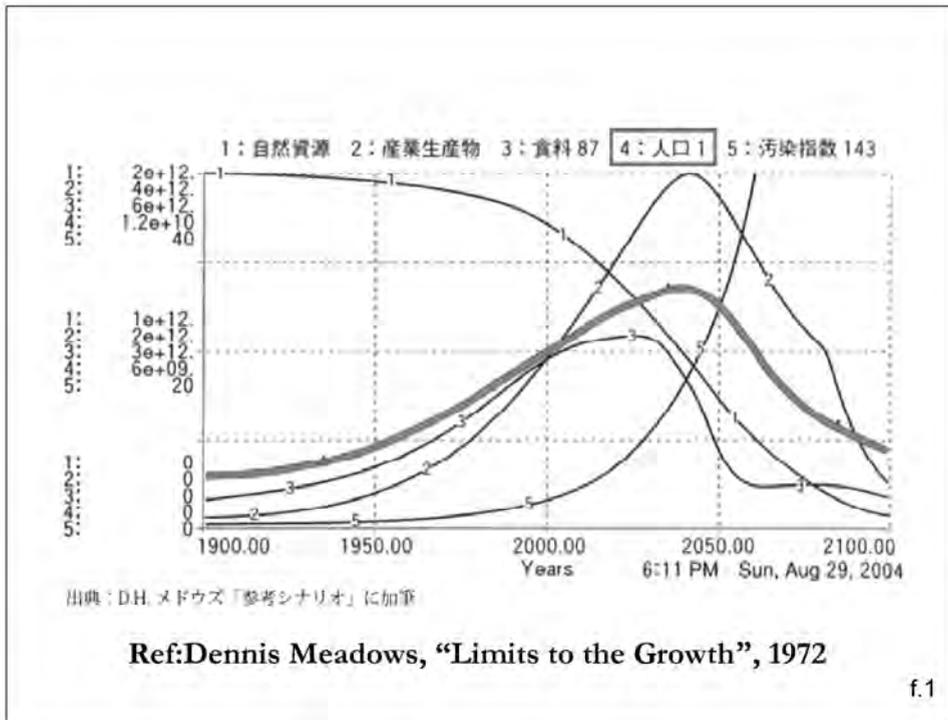
これは先に述べた環境の年1972年に出た有名な『成長の限界』という報告書に使われたものです。ローマクラブという優れた研究グループの報告書で、世界に衝撃を与えた。しかしかんせん、この学者グループの警告に応じて政策を変えた政府はほとんどなかったのです。ここに挙げたのが1972年に出た曲線ですが、報告書の主筆、デニス・メドウズが書いたもので、私が太くしたところが世界人口の曲線なのですが、これで見ますと2040年2050年くらいにピークに達する。あとは環境劣化により減少せざるを得ないという見通しです。その他の曲線は、産業生産物、自然資源、食料、あるいは汚染指数ですね。

この1972年のローマクラブの予想は、その後、ほとんど当たっているのです。これに対して先程紹介した『地球との和解』という本の中で同じメドウズが提唱しているのは、それでも、今すぐ人間が態度を変えれば、最後に生き残れるチャンスがあるという主張です。第二のカーブが書かれています。それはこの本の方でご覧ください。

この図は素晴らしいが、私はこれでもインパクトは少ないと思う。なぜならば、メドウズは1900年から2100年までの、たったの200年を取っていますが、それではいけない。人類史というのはそんなもんじゃない。もう少し歴史を広く見ていくとそれがどれくらいの急激な異常事態なのかがわかるだろう、ということで、私が描いた図表がこれですね。(f.2)

これはキリストが生まれた年からです。人類が生まれてからではないですよ。たったの2000年前から現在までと近未来を描いても、こういう角度で人口は上昇しているわけです。これを人口爆発といいます。19世紀の化石燃料発見後のこの爆発がいかに異常かということは、この図の方が実感できるのではないのでしょうか？ 私も、しばらくするともう地球が耐えられなくなって、環境の劣化により、エネルギー、食料の枯渇が起こり、人口の減少が始まると見ております。

メドウズの線はここのところで急激に下がっておりますね。私のカーブはそれを2100年の時間軸に書き直ただけです。同じ異常さをもっと切実に実感していただくために。2100年ごろには1950年ごろと同程度まで人口が減少するとメドウズは予測しております。



私は、そうはならないと。なぜならば、物理的な要素だけで見るとそうなるけれども、人間は知恵を働かすに違いない、それに対処した知恵を。ですから私はメドウズより少しだけオプティミスティックな曲線を描いてみました。しかしながら、1つだけ言えるのは、この降下が始まる場所、ここは、非常な痛みを伴う。現在でも、アフリカとか、南米の方で起きていること、それから中東で起きていることとも関連しますけれども、痛みを伴った減り方なのですね。厳しいコンフリクトを伴ったものです。

### 水と食糧の枯渇

まず水の問題がある。水はすでに、国連の中に淡水をテーマとする1つの部局があるぐらい巨大な問題です。その予測によると、2025年、もうほとんど明日とっていいこの時間帯に、決定的な飲み水の不足が起こるのです。Drinkable water ですね。現在もすでに起きているけれども、この地上で数億人の人に、もう飲める水が無いという状況が起こるといことです。

そして更に、すでに多くの人がいろいろなところで指摘していますが、干ばつや洪水や暴風雨、これは年々巨大化する。そして、食糧不足、エネルギー不足が起こる。メドウズの先ほどの予想はすでに現実に起きているのです。地球規模の食糧不足。現在これが起こりつつあります。そのときに何が起こるか？ それは文明の衝突ではなく、部族根性に戻った人間の生き残りの戦いであろうというのが私の予測です。

### 宗教は戦うのか？

かつて文明の衝突論というものがハーバード大のサミエル・ハンチントンによって提唱され、世界の共通認識になりました。ハンチントンが描いたのは、世界には8つの文明圏があり、そのそれぞれの頂上に宗教がある。それが衝突する。つまり宗教同士の争いが起こる。特にキリスト教とイスラームの間に起こる、という予言でした。しかしハンチントンは、私も彼の本を一生懸命読んだわけですが、大きな間違いを犯しているのです。その一つは「宗教が戦う」というイメージにあるのですが、ユダヤ教・キリスト教・イスラームという同根の一神論グループだけに適用できる不寛容の概念を、他のすべての宗教伝統に援用していることです。だから仏教とか儒教とかが生きている、あるいは神道というものも生きている地域——ハンチントンは日本文明も独立の1つと数えています、——に存在する宗教的寛容を考えていない。それらも同じように戦うという、まさに無知といえますか、他の宗教を学ぼうとしないところからくる過ちを犯しています。しかしながら、宗教は戦う、という彼の主張はメディアによる増幅作用を引き起こし、中東をはじめとする幾多の武力紛争を激化させました。

### 地球史と人類史

先程のところをちょっと戻りますけれども、人類史の時間軸をもう一度考えてほしいのですね。ビッグバンから始まります。これは宇宙が137億年前に生まれたということです

ね。それから、銀河系が生まれ、太陽系が生まれ、地球が誕生したのが約46億年前、地上に生命が誕生するのが約38億年前、それから人類の誕生、いわゆる猿人といわれるものも含めてですが、他の霊長類から東アフリカで枝分かれするのが700万年前というのが最近の学説です。年々さかのぼっていったものですから、普通はもっと小さな数字を取っていましたけれども、現在は多くの学者が人類の発生を700万年前に置いております。それからホモサピエンスというわれわれ自身の祖先の出現が約20万年前ですね。そして農業革命というものがありまして、これがメソポタミアの肥沃な三角地帯というところに始まる。同じころ長江河畔にも農耕が起きました。これは1万年をもう少しさかのぼると思えますけれども、わかりやすいように、1万年前と書いておきました。それから産業革命、これは約250年前の話であります。17世紀に科学革命があり、18世紀の産業革命はその帰結であります。こういう年代を考えると、この科学革命から現在に至る時間帯は、生命の出現はいうに及ばず、人類の出現から見てもたったの3万分の1の時間帯です。この3万分の1の時間帯に地球破壊が起こっているのですね。だからそれは異常事態である。このように認識すべきです。

科学革命に伴って起こった大きなこと、それは「自然との離婚」です。人間が自然と離婚した。それから人の価値が「存在」から「所有」に変わっていく。それは理性至上主義と共におこる。そして父性原理による力の文明。あとでこの辺をもう少し詳しくお話して行きたいと思えます。

われわれ地球システム・倫理学会には、3.11後に発信した二つの「緊急声明」があります。そこで我々が主張しているのは、力の文明から命の文明への転換、これが現在必要なのだと説いているわけですが、この中身は更にこれから考えていかなければならない、この研究センターでも考えていかなければいけないことです。

### 総合知の喪失

科学革命によって、人間は世界のすべてを知ることになるが、その時、我々はむしろ総合的な「智」を失った。それは人間の能力の中で理性だけに至高の価値を与える啓蒙主義を生んだのですが、その時人間の知にひずみが生まれたのではないかと、今や反省する時が訪れているのです。

つまり総合知としての古典の知恵に学ぶ、「足るを知る」という故人の格言の意味を思い出す、さらに最近、最先端の科学者、量子力学者、生物学者によって使われているホリスティックなアプローチ、というものの意味を考える。そして、科学革命以来の理性偏重から理性・感性・霊性のバランスの取れた人間像を回復するということですね。

そうした関連で、先程の成長の問題に対しても、フランスの思想家セルジュ・ラトゥーシュが説くデクロワサンス *Décroissance*、脱成長と訳しましたがけれども、デクロワサンスの理論というものに私は注目します。

先程、山型になった人口曲線を描きましたね。その頂上に近いところを横這いに維持していこうとしたら、とうてい地球は耐え切れないのです。ですから地球を唯一の棲家とす

る人類の存続のためには、デクロワサンス、脱成長ということを考えなければいけない。ラトウーシュはこれを考えているのです。新しい指標はGNH（国民総幸福度）です。GNPからGNHへの価値転換なんです。これは皆さんもご存じの言葉でしょう。国民総生産、グロスナショナルプロダクトからグロスナショナルハピネスへ。ブータンの国王が言われた、このあいだ来られたワンチュク国王の父上の同名の国王が言われたことですね。だから幸福度でその国が先進国かどうかを計る、産業生産力で計らない、こういう考え方ですね。ちなみにhappyplanetというサイトのランキングでは、世界最強国アメリカは幸福度で120位くらいになります。

### 文明は衝突しない、無知が衝突する

ハンチントンの罫ですが（この表現は、麗澤大学の松本健一教授が言い出した言葉だと思いますが面白いですね）、そのハンチントンの罫にはまったということは正しいと思います。ハンチントンの予言をあまりにもメディアが増幅して報道したので、本当に衝突するという状況が起きている。ところが私は1995年、ユネスコで行ったシンポジウムでも話しましたが、本当の文明は衝突しない。文明というものは出会いを必要とするものなのだ。出会って、共に豊かになる、お互いに豊かになるという性格を持っている。衝突するのは、無知です。文明に対する無知ですね。例えばブッシュ大統領は9.11の直後「彼らは文明に対して戦争を挑んだ」と言いましたね。この言葉は、実は東京裁判でキナン首席検事が連合国側の定義によるA級戦犯に浴びせた言葉と全く同一だ、と知っておくといいでしょう。こういう言葉の中に「文明」に対する大いなる無知があります。

9.11そして3.11がこうした現代文明の危機を露呈していると思います。それは近代文明の構造的欠陥であると私は申し上げたいのです。そしてそれは、遡れば、18世紀にヨーロッパを覆いつくした啓蒙主義というものがもたらした人間像の歪みに由来する、と。

先ほども予告しましたがけれども、そのとき人間が自然と離婚しているのです。と同時に母性原理というものが消失している。この自然、母なる大地への思慕の中に母性原理があったのです。しかし自然との離婚によって母性原理というものは忘却された。それから二元論的パラダイム、これは主客を峻別する存在論ですが、近代文明を律してきたものです。私はこれが今こそ終焉すべきだと言いたいのです。3.11によって明らかになったのは突き詰めれば二元論的パラダイムの害悪なんです。そこで、この二元論的パラダイムというものをもう少し明確にしたいと思います。そのため科学革命に帰りましょう。

### 科学革命はなぜヨーロッパだけに起こったのか？

科学革命というものが、17世紀にヨーロッパに起こる。伊東俊太郎先生の有名な5大革命説がありますね。比較文明論を学んだ人は皆知っています。その第一に人間革命というものがある、人類自身が霊長類から独立する。次に農業革命があって、人類はがらりと生活様式を変える。それから都市革命が起こって、また大きな転換がある。本当の文明というのは、都市革命以降だという人もいます。それは今から約5000年前の物語なのです。

それから精神革命、専攻塾の諸君も勉強している諸聖人の時代なのですね。ヤスパースの言葉で言うとアクセンツァイトですけれども、枢軸の時代、つまり紀元前6世紀にはじまりその後数世紀の時代です。キリストの出現までを含めることもできますが、人類の精神的な指導者、つまり、廣池千九郎博士が、四大聖人と言われた人達は全部その時代に生まれている。その精神革命という時代があって、それから最後に、17世紀、科学革命というものが起こるのです。ところがこの科学革命というものは、ヨーロッパという1地域だけに生まれる。その前の4つの革命は、ほぼ全世界に同時多発的に起こっているのに。

ではなぜ、科学革命に限ってヨーロッパだけに起こったのかということをお問いたださなければいけない。そこで私が注目したのはロゴスという概念とトーラーの概念です。トーラーというのはユダヤ人の戒律です。旧約聖書でいうとモーゼ5書、旧約の創世記からモーゼに関する5書がありますけれども、これがトーラーなのです。

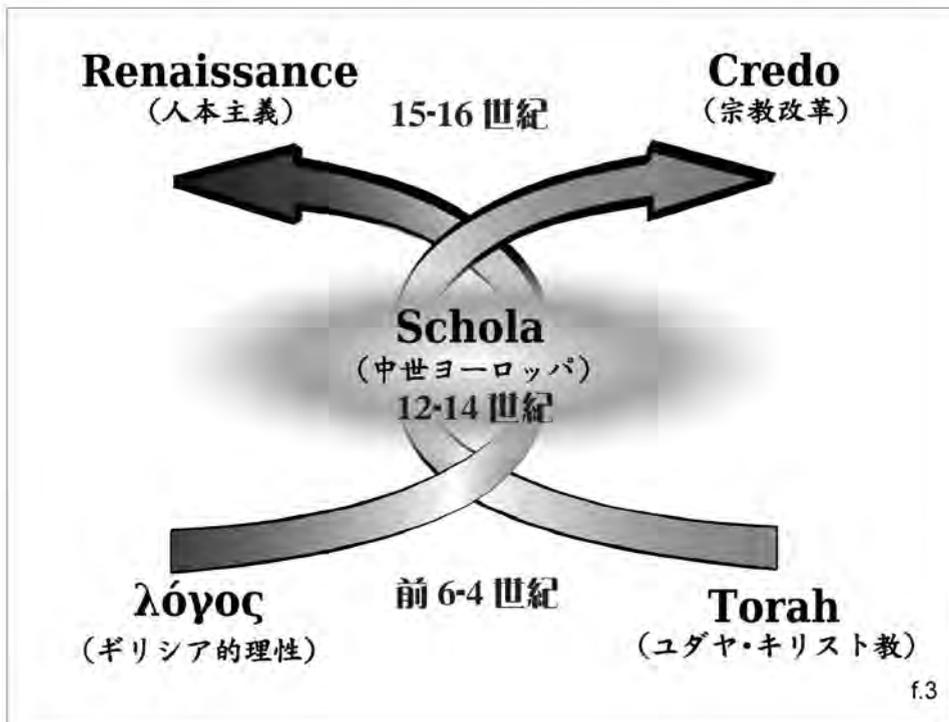
これに対しロゴスの世界観というのは古代ギリシャに起こった自然科学の世界ですね。そして実はこの二つの異物を融合したヨーロッパには、中世の黄昏、厳しい聖俗の葛藤があった、と指摘したいのです。聖とは教会のことで、俗とはいわゆる学者のことを意味しているのです。特に科学者です。その間に葛藤があった。それは言い換えると理と不条理の戦いでした。で、そこに起こったのが「倫理と真理の棲み分け」です。つまり、教会の方にあるのは、実際には不条理な教えなのですね。バイブルを読んだ人は感じていると思いますが、この聖典はロゴスを超越したものです。単に信ずる他はないものです。例えば Trinity 三位一体という概念、これは信じるほかは無い。父と子と精霊は一体である、信じるほかは無い。処女が懐妊する、これも信ずるほかは無い。キリストは復活する、これも信ずるほかは無い。そういうすべてのものがキリスト教の説く真の世界であり、その真は理性の世界ではない。そこで、あくまでも理性で真理を求める自然科学と、信を上位におく教会の戦いが非常に永く続くわけですね、中世以降は。

そしてこのときに起こったのが、これが重要なことなのですが、倫理と真理を棲み分けるという解決方法だったのです。二重真理説です。つまり、価値を問う真理、これは教会の教えだ、価値を問わない真理は科学がやるべきだと。端的に言えば「倫理は教会、真理は科学」、これが棲み分けなのです。ヨーロッパは教会と自然科学の拮抗をこの棲み分けで切り抜けてきたため、そこから「科学は価値を問わず」、英語で言いますと Value free という根本的な科学の立場が生まれる。価値を問わないとは善悪を考えない、ということです。善悪は教会の領域だから、科学が考える必要はない、という立場です。そしてそれが、後々の戦争の文化というものを生み出した、と私は考えるのです。そしてついに、広島、長崎に原爆を投下したマンハッタン計画というものに至る、ということです。

#### ヨーロッパはX型を描く——止揚と分裂

ここでもう一度言います。価値を問わず、棲み分けの意味、これをもうちょっとはっきり分かってもらうために私が描いた図がこれです。(f.3)

この図を見てください。こういうふうには描かなければヨーロッパは理解できないという



ことですね。一方はギリシャのロゴス（理）でこちらが先程のトーラー（信＝不条理）の世界、これとこれは実は水と油です。

いかに不条理かという1つの例を挙げましょう。ユダヤ人の祖にアブラハムがいますね。アブラハムは100歳にして子供を得る。その奥さんはサラです。年からして絶望的になっていた二人に、夫100歳にしてやっと息子が授かる。これがイサクです。ところがあるとき神がアブラハムに、何を命じたか。汝の子イサクを生贄とせよと。どうですか。これが不条理の世界なのです。キルケゴールはこのためだけに『あれかこれか』という本の中の1章を割いている。キリスト者たることを求めた彼は、聖書のこの物語に悩み悩んで、それがこの本の根幹になっています。それくらい不条理じゃないですか。神がアブラハムに、汝の子を、我が生贄に捧げよ、と命ずるとは。

生贄となる羊のことをなんと言いますか。ヘブライ語でホロコースト、丸焼きにされる贖罪の羊、これがのち別の事件で使われたホロコーストの語源です。アブラハムはイサクを連れて山に登ります。するとイサクは「お父さん、ホロコーストはどこにいるの」と聞きます。ホロコーストはこの先に神様が用意してくれているよと。そしてどんどん登っていきます。そして最後に薪を積むのです。その上でのどをかき切ったホロコーストを、贖罪の羊を焼くのですよ。丸焼きにするんです。その儀式が生贄の儀式なのです。ところが最後に行き着いても、羊がない。イサクがその羊はどこにいるんですかということ、アブラハムは言います、お前が羊だと。すごいですね、この話は。そして本当に薪を積んで、

いざ子どもを殺そうとするのです。100歳の父親が剣を振り上げて。そのとき天使が現れて、待てと、その手を止める。お前の信仰心はわかったというんですね。これがアブラハムの物語です。このような世界を、どうして理性で理解できるでしょうか。これは完全に不条理の世界です。この不条理、ただ信のみがあるという世界がここにはある。

ところが、イエスの断罪、磔刑の後、何が起こるか、ローマがユダヤ人をエルサレムから追放しますね。1世紀の物語ですけども。ユダヤ人は離散民、ディアスポラ、となって世界に散っていき、その一部がローマに行きます。迫害されつつそのローマ帝国の地下に潜ってキリスト教の信仰を守り、ひっそりと生き延びる、これが200年も続くのですね。そしてやっと、コンスタンチヌス帝のような人が現れて、キリスト教はローマに公認され、さらに国教になります。それが4世紀です。

ではその4世紀に何が起こったかという、元来はユダヤ＝キリスト教とは無縁で、それと戦ってきたギリシャの後継者ローマがキリスト教の教義を吸収するのです。そこに生まれてくるのが中世ヨーロッパというキリスト教の世界、神学の方では、カルタゴの大司教であったアウグスティヌスもいますけれども、13世紀にパリの神学校、ソルボンヌでカトリック神学を大成したトマス・アキナスが最高峰だと私は思っています。教義神学の哲学化をスコラ哲学と言いますが、トマスによりそれが集大成される。ここにヨーロッパが生まれた、と言っていいほどです。ですから、ヨーロッパとは元来、理性と信仰、理と不条理の合体なのです。これがスコラ哲学により非常に上手く止揚（アウフヘーベン）され、そして見事な神殿になるのですね。これが中世ヨーロッパの姿です。ですからイギリスの歴史家トインビーは、シャルトルの聖堂を見て、これがトマス・アキナスの『神学大全』の具現化だと言っています。

『神学大全』という本は、私自身も京大の院生時代、高田三郎先生によるラテン語原典からの翻訳のお手伝いをしたので、非常に印象深く心に残っているのですが、本当にシャルトルのカテドラルのような大作であり、傑作ですね。原名 Summa Theologica の Summa とは「集大成」を意味しますが、この中に当時のすべての集約されている。ヨーロッパの過去のすべての思想が。ところが、これはやはり水と油のような異質なものの大胆な合成の仕事であったのです。しかし、水と油は永く合成しておくことは出来ない。私が使っている例はフレンチドレッシングです。フレンチドレッシングというのは、皆さんもお好きだと思うのですが、サラダにかけるのですが、ピンを振りますと綺麗なドレッシングになりますね。しかしピンをテーブルに置いておきますと、次第にお酢と油に分かれてゆくでしょう。そういう現象がヨーロッパで起こる。つまりトマスのやったことは見事なフレンチドレッシングの完成だったのですね。しかしトマスの死後、その後継者たちによりスコラ哲学は続いていくのですが、14世紀、15世紀になると、それがやはり酢とオリーブオイルに分かれていくという現象が起きるのです。その頃のベスト大流行という問題もありますけれども、その分離現象は注意すべきです。

その15世紀の世界を見事に描いた作家は、日本では平野啓一郎です。『日蝕』という本を書いた人ですね。これは芥川賞を取りましたけれども、まさしく、この中世の黄昏を書

いた。異端審問も出てくるし、錬金術も出てきますね。修道者である主人公はある本を求めイタリアへの旅にて、数々の奇怪な体験をする。この過程が妖しい濃紺の星空を見るようなタッチで書かれている。平野啓一郎の本に中世の黄昏を感じる事が出来ます。

この図ではロゴスとトーラーがスコラ哲学により合成され、これがまた分かれて、もとへ戻っていく様子を表現しました。トーラーの世界は、ルター、カルヴァンの宗教改革となる。一方はロゴスの再発見、これがルネッサンスになる。実はこの前には12世紀ルネッサンスというものがあり、アラビアつまりイスラーム世界の貢献が非常に大きい。それにより古代ギリシャの学問がヨーロッパの中心に入っていくのです。本当はそれがあったからこそ、スコラ哲学も成り立ったのです。例えばアリストテレスの著作が12世紀にラテン語に翻訳されたのはトレードの図書館でした。そこにアラビア語版の全集は残っていた。ギリシャ語からアラビア語になっていたのを、今度はアラビア語からラテン語に訳すという作業が行われたのです。というのも、アリストテレスの原典は一部を残し、散逸していたわけですから、トマスは、新しい神学をセミナー形式で書くに当たり、このラテン語訳をベースにしていますから、アラビアの仲介というものがあって『神学大全』自身が成り立った、と言っていいのです。

このようなアラビア経由のギリシャ哲学に触発されて理性主義も台頭します。私はルネッサンスは人本主義であると言っていますが、言い換えれば人間中心主義ですね。それが確定するのが15世紀のイタリア・ルネッサンス、16世紀のフランス・ルネッサンスとみています。

同じころに宗教改革が起こっている。だからこの二つは、本来的に矛盾した要素の合成という無理をはらんだ中世からの双方向への原点回帰と言えるのです。これがヨーロッパの姿です。そしてこの転機には、ヨーロッパがアラビアを通して、ギリシャ的理性を再発見するということがあったことを銘記してください。このアラブ世界の貢献は、伊東先生の『12世紀ルネッサンス』という本を読むと非常によくわかります。素晴らしい研究です。

人本主義ですが、ルネッサンスのことを文芸復興と言うのは当たっていないことです。私はヒューマニズムという語を「人本主義」と訳した方がいいと思うのです。つまり人間中心の世界観ですね。そのときまでは人間というものは神から見られている存在であったのですが、それが神を見る存在に変わる。神のまなざしの中にあつたものが、神を見るものになった。神さえも対象になる。これは重大な転換でした。

これにもう一つ書き加えようと思ったのですが、この時ものの認知の仕方がコミュニオンからパーセプションに変わるのです。コミュニオン Communion という深い知覚が、パーセプション Perception になる。わかりますか、このニュアンス。例えば本当の宗教的な絵画を前にしたとき、ロシア正教会なんかはまだそうなのですが、それは対象じゃないのです。あのイコンは、イコンそのものがご神体で、神を対象として描いたものではないのです。それを拝する信者の態度はコミュニオンなのです。合体なのです。それに対してパーセプションというのは知覚です。あくまでも前に置かれた対象を見る。だけ

ら見る主体と見られる客体が分かれた状態においてパーセプションというものは起こる。一方は主客合一、他方は主客二分です。

### デカルトの目

それが実は、デカルトがやったことですね。このデカルトの目というのは、非常に大変な革命でした。これを理解するのに、生命系というものを考えてみましょう。人間はもちろん生命系に属しています。

「生命誌」という言葉がありますが、これは中村桂子さんが使っている言葉で、生命の歴史、ヒストリーじゃなしにヒストリア、つまり物語、生命のストーリーですね。(f.4) デカルトがやったこととは、扇型に描かれたこの生命の体系から人間、それも主観としての自己が抜け出るといことです。これを私先程「自然との離婚」と言いました。その元はコギトです。Cogito ergo sum という言葉は皆さんもご存知ですね。コギトとは我思う、考えるということですよ。

「われ思うゆえにわれあり」<sup>1)</sup>、これがデカルトを語るときに、みなが引く言葉です。しかしこのような理性で思考する、意識としての個人、これは抽象的な存在です。つまり人間はこのとき限りなく抽象的な存在となっていくのです。ここに地球があるとするとどこにデカルトの目があるかということですね。(f.5)

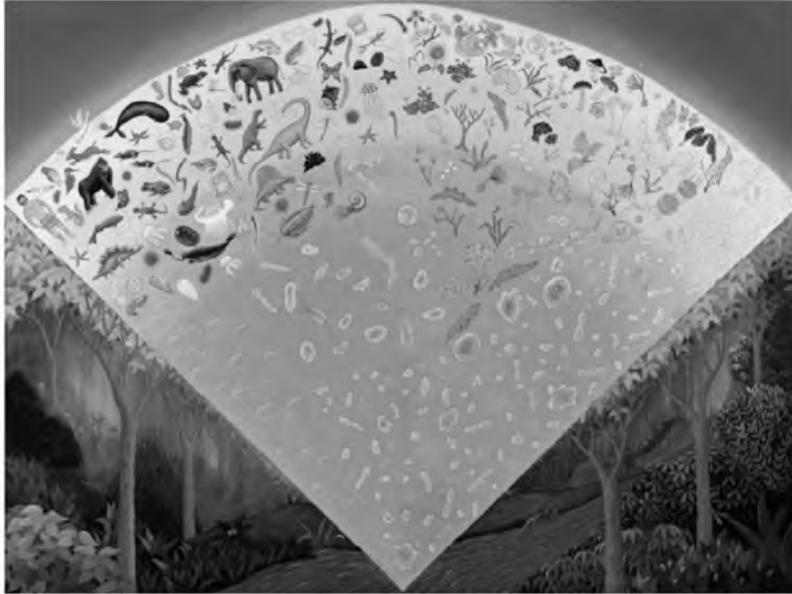
デカルトの目はここにあります。われわれはもちろん地球内存在です。ところがこの目はそこから外にでている。超越している。自然全体を対象としてみる目です。自然のすべてが object になっているわけです。

こんなところにある目は他ならぬ、創造神の目であります。この時、人間は神に代わったのです。中村桂子さんの生命誌の、私が好きな絵なんです、ここに生命のすべてが詰まっているのです。生命というのは一点から始まる、そしてカンブリア紀の種の爆発等を経て扇状に広がっていきます。これが進化の歴史なのです。「進化とは、多様化のことである。」これが中村さんの言葉です。そしてこの扇の一番外側、これが現時点なのですが、ちゃんとここに人間がいます。人間はこの扇の中に入っています。ところが先程のデカルトの目は、この外にあるわけです。そこが大きな違いです。中村さんは非常に美しいのちの扇を描いてくれました。

ここに近代文明を作った言葉としてあげておいたのはデカルトの Discours de la Méthode 『方法叙説』の中に出てくる言葉ですね。「(人間は恰も) 自然の主人にして所有者となった」。これは人間の技術工芸のようなことを語った次に出てくる言葉なのですけれども、非常によく引かれる言葉ですね<sup>2)</sup>。「知は力なり」というベーコンの言葉もこれに対

1) ラテン語では主語を抜かすことができます。エゴ・コギト・エルゴ・エゴ・スムなのですけれども、そのエゴは取っていい。つまりコギトのように一人称単数の動詞の語尾で我というものがはっきりしていますからエゴは抜かしていいのです。ergo は「故に」、sum は、be 動詞の一人称単数で完全に書けば ego sum です。なお自らが校正したラテン語版では、デカルトはこの sum の後に existo と書き加え、「われあり」の意味を強調しています。

2) 「方法叙説」は多くの訳本が間違えて「叙」を「序」にしているから注意してください。たとえ他の本に序文の序が書いてあってもそれは間違いです。



【生命誌絵巻】 協力: 田まりな 画: 橋本律子

中村桂子「生命誌—生命という知」より

f.4

## デカルトの目

- 生命誌の体系から抜け出る
- 自然との「離婚」
- Cogito——デカルト的理性の目は「神の目」
- 抽象的な存在——人間のAbstraction



f.5

応しています。

### 啓蒙主義——存在から所有へ

啓蒙主義は英語で Enlightenment と言いますけれども、18世紀をピークとする理性至上主義のことですね。フランス語ではこの世紀のことを「光の世紀」といいます。このとき理性に至上の価値を付与しました。これもまた、先程のデカルトが出発点です。感性と霊性というものは下位に置かれました。そこから何が起こったか？ 確かに科学は進み、物質文明は大きく進歩する。しかし同時にこの啓蒙主義は差別の原理になったのです。

まず女性が差別されました。女性は理性と感性を分かち得ない存在である、と判断されたのです。それで下位におかれるということが起こっているんです。あのヨーロッパで。

次に子どもが差別の対象になりました。子どもは理性がまだ完全に成熟していない存在だ、すなわち未完成な人間だとされたのです。

それからヨーロッパ人以外の民族のすべてが差別の対象になります。つまり彼らは理性を独立させていない、そういう理由なのですね。理性、感性、霊性というものを生活、way of lifeの中で渾然一体として生きている民族は、すなわち野蛮人であり、啓蒙さるべき存在、とされたのです。完全に理性的な存在にならないかぎり未開人なのです。啓蒙主義にとっては。それが植民地主義における非征服民、原住民への見方であり、植民地主義の正当化にも使われた理論でした。

### 抽象的存在となった人間

ところが実際には先程言いましたように、この時人間存在の喪失が起こっている。つまり人間が理性のみの存在になっていくということは、人間が本当の存在の半分を失うということですから、Abstraction になっているということです。「抽象的な人間」ですが、これは私が昨年オーギュスタン・ベルクと対話したときに一番意見が合ったところです。それが所有欲を生み出すのです。「人間は存在の半分を失った。その空白感を埋めるために所有に走った」、これはオーギュスタン・ベルクの言葉ですが、ガブリエル・マルセルの言葉を使うと、存在から所有に価値観が転向する、ということです。ガブリエル・マルセルはそれが同時に成長するものではないと、その著『存在と所有』“Etre et Avoir”の中で言っています。存在と所有は反比例するのだ、ということをはっきりと指摘しています。これは大切な指摘です。すると神はどうなるのでしょうか。Dieu n'a rien étant tout、「神は何も持たない、神はすべてであるから。」<sup>3)</sup>

存在と所有は反比例する。これはすばらしい指摘ですね。思えば良寛やアシジの聖フランチェスコのような人は無一物でした。

3) 実はガブリエル・マルセルの『Etre et Avoir』を読んでもこの形では出ていません。しかし、これはよくあることです。例えばルソーは「自然に帰れ」と言った、とされる。しかし、ルソーのどの本にも、その言葉は無いのです。しかしそれが間違っているかといえば、間違っていない。つまりルソーの思想を集約していくとそこに行く。ガブリエル・マルセルの場合も彼自身が書いた本ではないけれども、トロワフォンテーヌという神父が書いたガブリエル・マルセルの解説書に、マルセルの思想を突き詰めていくとこうなると書いてあるのです。

### 教権の破壊

そこでわれわれは次の問いを立てます。教会はなぜ破壊されたのか、と。近代を象徴するフランス革命の後、教会が破壊されます。ルイ16世とマリーアントワネットがギロチンにかかり、王室が絶えたことは知られていますが、同時に教会も破壊されていることはあまり知られていません。略奪もありました。我々が知るべきは、なぜそうした教会の破壊があったのかということです。

中世において教会は、その教会を造った住民たちの心の家、拠り所であったのです。ところが近代の所有の価値観からいうとそうではなく、住民は貧しいのに教会は余りにも立派だ、大変な財宝をもっている、ということになる。今のバチカンのように。それを造った人びとは貧しい、これは正義だろうか。個人主義が確立した所有の価値観から言うとならぬのです。

しかしそうではなかった。中世において多くの人は、例えばシャルトルの大伽藍を作った人々は、あるものを全部持ち寄って、あそこにはマリア様の住むお家がないとあって、それをつくるわけですね、貧しい人はその人なりに労力を出し、お金の人はお金を出し、技術がある人は技術を出す。皆が自分にあるものを持ち寄って建造したのです。だからその教会は、他人のものじゃないんです、自分たちの心の家なんです。教会はお金持ちの屋敷とは違い、彼らの共有財、あるいは公共財なんです。そこにおまいりして、そこで心を癒され、そこを集会所として生きてきた、そうした中世のコミュニティの生き方があったのです。

ところが、14世紀、15世紀、16世紀と続くいわゆる異端審問、これによってだんだんそのコミュニティが破壊されていきます。また魔女狩りが行われる。錬金術師も異端とされ、悪魔の使いとされるといようなことが続いて、大勢の人が殺されていく。そのとき教会は、もうすでに、精神的な支柱というよりも、王権に次ぐ一つの権力になり果てた、と言えます。異端審問とは現在のCIAあるいはKGBのやり方を思わせるものでした。教会はこうして変質していました。フランス革命は王権を倒すと同時にこのような教権を倒したのです。

### 所有の文明の到達点——近代資本主義

所有の文明というものが近代資本主義をつくります。この時すべてがデジタル化されていく。量のみならず質さえもデジタル化され、更に人さえも数字となる。こういう時代が来ました。チャップリンの「モダンタイムス」はその痛烈な批判でしたが、その最たるものは金融工学というものだろうと私は思います。これを Market Fundamentalism 「市場原理主義」と私は言うつもりですが、こういうものが現在世界を席巻している。これは所有の文明の極みであります。これが1対99パーセントという社会構造を生み出しているのです。この数字はまさに戦争の文化の数字です。それに対し、マハトマ・ガンジーはこう述べています。「地球は人類全体の Need (需要) を満たすことが出来る、しかし

Greed (強欲) は満たせない。」

このグリード、先ほど言ったようにオーギュスタン・ベルクの私との対話で最も印象に残ったのが、17世紀以来、人間は、その半分を失った。その空白感を満たすために、Greed に走るのだということですね。

### 外閉

そこで現在起こっているのが、地球全体での資源の奪い合いであります。まさに倫理無き商売です。この人間の態度を表すのに、もう一つオーギュスタン・ベルクが作り出した造語ですが、Forclusion 「外閉」という言葉があります。これは何かというと、都合の悪いことは家の外に出して戸を閉める、ということです。だから私は、例えば日本で失敗した原発という危ない装置を、日本ではつくらないけれども他の国には輸出する、これがまさにこれだと言いたいのです。自国ではまずいが他の国ならいい、例えばベトナムならいい。そういう態度を取るということはまさしく「外閉」であり、倫理に悖る行為だと思っています。

### 孤児となった人間

人類、特に西欧がやってきたことですが、4世紀にキリスト教が入ってきますと、母なる大地の神、大地母神が殺されます。地中海世界でもそうです。そして科学革命以降、17世紀に父なる神を殺した。この二つの罪を人類は犯したのです。それが、「神は死んだ」というニーチェの言葉になっている。

それからフランス革命の人権宣言です。これは世界人権宣言のもとになる人権宣言ですから注意してほしいのですが、この中に神という言葉はいっさい出てこない。そうすると、神にかかわって、社会を律するのは何なのか、それが契約すなわち法という思想であります。法で社会を律する、ホッスバルソーの考えもここからでてきます。今は時間が無いので詳しくは入れませんが、神無き人間同士の「社会契約」としての法律、この法は、インド思想のダルマではない、ダルマとは真理です。それからユダヤ＝キリスト教で説かれた神の律法としてのトーラーでもない。法・律というこの二つの言葉を使っていますけれども、それとは違うものだということを言っておきたいと思います。

ところで、人間像というものが歪みを持ってきたことを考えるとき、この大地母神が重要なのです。Magna Mater という言葉があるのですが、これは実は地上のほとんどすべての民族が持っていた信仰ですね、母なる大地という言葉。これが4世紀以来殺されていくということです。そして科学革命により、人間が神に代わっていく、このことが父なる神を殺した、の意味です。そうすると、実は父母を共に殺した存在として人間が近代文明の創立者になっていくということですね。

「神は死んだ」という有名な言葉ですけれども、ニーチェが『ツァラトゥストラはかく語りき』の中で述べた言葉です。しかし、ニーチェが神を殺したように考える人がいたらそれは間違いです。ニーチェはすでに死んでいた神を見出したのです。

それからニーチェの後に起こるフランス革命ですが、神が不在です。今言いましたようにフランス革命は、王権と教権を倒しているわけです。そこで造られた人権宣言は人間の約束事で神から与えられたものではありません。そしてこの中に欠けているもの、それが「未来世代の権利」なのです。フランス革命の人権宣言は現存する個人と個人の約束なのです。そこからは未来世代ということは一切出てこない。これが重要な点です。もっと言えば、それは男性間の約束であり、更に選ばれた市民同士の約束であります。

それに対してジャック・イヴ・クストーは、私が非常に尊敬していた人ですが、未来世代の権利憲章というものを請願として、大きな運動を起こしました。これが全世界で200万人ぐらいの署名を集めました。1997年、クストーが亡くなった年に、それがユネスコ総会で「未来世代に対する現代世代の責任宣言」として結実するわけですね。このとき全世界は、この宣言にこぞって賛成し、採択しているわけです。ところが今、未だ地上の誰も解決策を見出していない核廃棄物を造りだし、有害な放射能を何千年も未来世代に残すという行為は、明らかに国際社会での誓いに対する違反行為であります。自らがサインした未来世代に対する現代世代の責任宣言に対する背信行為であると私は言いたいのです。それが地球システム・倫理学会が今年の3月11日に出した、第二次緊急宣言の核心を形作っています。

### 近代の人文知

以上を要約しますと、デカルトから出発した啓蒙主義の問題がありました。ロゴスというのは分ける能力ですが、最初に分けたのは、主と客、すなわち二元論、Dualismといわれるものですね。すべてを客体化していく、そこから分析、細分化、専門化というものが起こってくる。対象を外から見る目ですね。観察する、これが科学的態度と言われた。しかしこの科学的なアプローチは実体の一面を細かく観察するけれども総体的な知は産まない。なぜならば、それは対象から離れた目だから一面が見えるけれども、その内側とか裏面とかが見えない。サティアーグラハとは、ガンジーの言った真実の把握ということですから、そこには至らないということでもあります。

認識論というものがカントをはじめとし、18世紀、19世紀に花咲くんですけども、その前提には二元論がある。主客の峻別、主体と客体、主観と客観の峻別がある。カントはKritik der reinen Vernunft『純粋理性批判』を書きましたね。ここでカントが問うたのは、Ding an sich「ものそのもの」の認識は可能かということです。これが第一批判の設問であります。最後には出来ないという結論になるのですが、なぜ彼はこのような問いを立てなければならなかったのか、ということ、むしろ問わなければいけない。なぜならば、世界の他の地域でこのような問いを問うたことがない。しかも、ヨーロッパにおいても近代以前には問うていない。なのに、なぜそれが必要だったのか。これが先程の二元論から出発したことの帰結であります。古代ギリシャ哲学にもこの問いはないのです。だから、このカントの設問自体に、先程述べた、科学主義の父といわれるデカルトの目がある、ということですね。

またここでぜひ考えたいのは、西欧の科学的思考を律した排中律の横暴です。これはアリストテレスの論理学の三つ目の法則でありますけれども、中間を排除する。あるものはAであるか non-A であるかで、それが同時に成立するということはあり得ないということです。To be or not to be ですね。これはまた光か闇かという問いになり、9.11の後のブッシュの言葉、「われわれにつくかテロリストにつくか」という言葉になっていくのです。排中律の思想は、「間」というものを考えない。実は間が大切なのです。人間の深層は「間」In between を生きているのです。更に哲学的に進めば「一即多」「色即是空」の世界観がある。これはイスラームの哲学とも通底する。だからこういう排中律の横暴を正す、ホリスティックな人間把握が必要となります。

それは理性偏重を正し、感性、霊性と響きあう理性というものを取り戻す、ということです。全人性を取り戻すと言い換えてもいいでしょう。これが、われわれが問うている父性原理から母性原理への回帰、あるいは母性原理の見直しなのです。母性原理とは何かについては鶴見和子さんの言葉が一番いいのではないかと思います。「命の継承を至上の価値とすること」、それが母性原理であるという定義です。その点、われわれの地球システム・倫理学会の方向は定まっております。

#### 排中律から包中律へ

包中律という言葉は実は新しい言葉です。included middle、フランス語で Tierce incluse。この言葉を私が最初に聞いたのは1993年、ユングが住んでいたスイスのロカルノで行われた Transdisciplinarity シンポジウムでルーマニアの理論物理学者が発表したときでした。排中律ではなく包中律というものがある。実体 Le réel は複数の次元をもつ、と。これを敷衍していきますと、今述べた in between の考え方にも、日本に存在した間という観念にも行き着く。間は時間であり空間でもあります。この「間に光あり」というのは私の言葉ですが、その例証として私が申し上げたいのはゴッホのひまわりです。なぜあれほど輝くのであろうかということですね。実はゴッホの絵には、黄色だけではなく、様々な色が、混ぜ合わされずに、並置されている。黄色、褐色、緑、青という色が。そうするとそれが灰色にならずに光を放つのです。異なった色の「間」によって光を放つ。それに関して今思いついたので例に加えますが、シドニーのオペラハウスは世界遺産に登録されていますね。すばらしい帆掛け船のようで真っ白です。あれは純白に見えますが、そのタイルは白だけじゃないんです。よく見ると20に1つくらい褐色のタイルがはめ込まれています。そうすると白よりも白く輝く。すごい技術ですね。これはちょうどゴッホのひまわりと同じです。

最後に Message from Tokyo というのに注目してほしいのですが、これも麗澤大学出版会から『科学と文化の対話』という本になって出ています。1995年、国連大学で行われたユネスコ50周年記念シンポジウムの結論です。この研究センターの多くの方が、分担して訳して、出したものでありますけれども、最後の部分はこういう一節です。This new holism recognizes the enfoldment of the whole in its 'parts' and the distribution of the

‘parts’ over the whole. (新しい全一性の認識によれば、全体は部分に包含され、部分は全体に行きわたっている。) 起草者はアメリカの最先端の量子物理学者ヘンリー・スタップとカール・プリブラムです。これを私は、「全は個に、個は全に遍照する」と訳しました。

この考えは、すでに、排中律を完全に乗り越えた立場に立っているのです。これが現在の量子物理学の存在論だとすると、それは華嚴思想にも一致する、一即一切、一切即一ですね。これは一即多・多即一という禅の言い方でもいい。イスラームのタウヒードが同じことですね。だからここで量子力学の存在論は華嚴思想、それからイスラームのタウヒードの思想とも通底する。疾くにこのことを言おうとした哲学者は西田幾多郎です。西田は絶対矛盾の自己同一という言葉でこのことを表現しています。また西欧哲学はここにこそ限界があると。

科学の限界、これも西欧の良心、ガブリエル・マルセルの指摘ですが、Problem という語自身が、前に置くという意味で、自分から切り離して対象とするときしか Problem は起こらない。決して主・客に切り離せないものを彼は「神秘」Mistère と呼んだのです。

実体を水晶のような結晶とすると、科学は自らを外に置き、その一面を観察するが、水晶自体の中には入っていけない。ここに問題がある。私は人文科学が自然科学のこの方法を踏襲してきたことに限界があるのではないか、と思っています。われわれが今求めるべきは総合知、つまり感性・霊性と響きあう新しい理性主義に基づいた、ホリスティックな存在把握であろう、それを可能にするアプローチは Transdisciplinary (領域横断的) なアプローチである、と。

最後に私が東大でも申し上げたのは、古典は見直されるということでした。精神革命の師たちの言葉はまさしくそうした主客の二分法、二項対立にのっとった言葉ではなかったのです。その4人の先覚者たちに特徴があるとすれば、その誰1人として自らの著作がありません。その4人の教えとして知られるのは、それを祖述した人が書いたものです。ということは、それらの人は全人性を持って教えを説いたという証拠である。すなわち全人的な人格の力が人々を動かしたのです。

先程、中世ヨーロッパにおける真理と倫理の棲み分けということを行いましたけれども、それとは対極的に、このような人格の言葉の中には真理と倫理の合一が見られるのです。それは Scientia (知) ではなく、Sapientia (智) と呼ばれるものです。

\* 道徳科学研究センター講演、平成24年6月6日

(キーワード：科学・総合知・地球・ユネスコ・デカルト・啓蒙主義・存在と所有)